文字史料と噴火堆積物を照合して組み立てた浅間山 1108 年噴火の詳細シナリオ

Time sequence of the 1108 eruption of Asama Volcano constructed from the correlation between deposits and historical documents

早川 由紀夫 [1]
Yukio Hayakawa[1]

[1] 群馬大・教育
[1] Faculty of Ed, Gunma Univ

http://pringles.blog23.fc2.com/blog-category-12.html

浅間山のＢスコリアと追分火砕流を含む噴火は、同火山で著名な 1783 年噴火の 2 倍のマグマを噴出した。完新世に前掛山から発生した噴火の中で最大規模である。この噴火が起こったのは、藤原宗忠の日記である『中右記（ちゅうゆうき）』に書かれた記述によって 1108 年だったことがわかっている。したがって今年で、ちょうど 900 年になる。

早川・中島（1998 火山）は『中右記』の記述と現地に残る堆積物を照合して、この噴火の推移を初めて詳しく論じた。その後、藤原忠実の日記『殿暦（でんりゃく）』にも浅間山の異常を書き記したと解釈できる記述が複数あることがわかった。たとえば嘉承三年八月十八日（1108 年 9 月 26 日）の条に、未明に北東の方角から太鼓のような大きな音が聞こえたので、白河院が「この音は何か」と忠実に問い合わせたと書いてある。

『中右記』と『殿暦』の記述を、浅間山麓とその東方で 1998 年以後も継続して行った地質調査の結果と照合すると、1108 年噴火のシナリオをさらに詳しく次のように組み立てることができる。

1108 年 8 月 29 日、B スコリア下部の噴火が起こった。それは一日ほどで終わった。追分火砕流からのサーマル火山灰は B スコリア下部を整合に覆い、B スコリア上部に浸食不整合で覆われているから、この噴火の最後の段階で追分火砕流が山頂火口から南北 2 方向に流れ下ったと考えられる。それは、おそらく 8 月 30 日だったろう。噴火はいったん収まったが、4 週間後の 9 月 26 日未明から B スコリア上部の噴火が始まった。これは数日継続したらしい。B スコリア上部の分布軸は北東に伸びていて、東南東に伸びる B スコリア下部と方向が違う。4 週間の時間差は、この風向きの違いをうまく説明する。上野国の田畑の多くは浅間山の南東に当たるから、初めの噴火で使用不能になった。六里ヶ原に下った上の舞台溶岩が流出した時期は、史料から推定することができない。

この間、八月三日（9 月 9 日）に鳥羽天皇が即位して、嘉承を改元して天仁とした。浅間山の噴火開始とクライマックス（追分火砕流）は、この改元の前に起きたから、この噴火を単に天仁噴火と呼ぶのは適当でない。嘉承三年噴火あるいは嘉承天仁噴火とでも呼ぶのがよい。

九月五日（10 月 13 日）になって、上野国からの被害報告がようやく京都に上がった。朝廷は書かれた事態を深刻だととらえて、九月二十三日（10 月 31 日）に宮中の渡り廊下で軒廊御卜（こんろうみうら）という占いを執り行った。

なお、源師時の日記『長秋記（ちょうしゅうき）』の大治四年二月十七日（1129 年 3 月 9 日）条にある「前年灰砂」を、峰岸純夫は、浅間山が 1128 年に噴火したと読み、早田勉はこれこそがＢスコリア上部の噴火であると考えた。しかしここの「前年」は去年ではなく過ぎ去った年と読むべきである。1108 年噴火災害を指している。1128 年に浅間山が再度噴火したと読むのは誤りである。地質調査からも、Ｂスコリア下部と上部の間で 20 年もの時間が経過したとは認められない。

まとめ：浅間山の 1108 年噴火推移と宮中の出来事
8 月 29 日（嘉承三年七月二十一日）Ｂスコリア下部（高崎へ）
8 月 30 日　追分火砕流（大笹と追分へ）
9 月 9 日（天仁元年八月三日）鳥羽天皇即位。嘉承を天仁に改元
9 月 26 日から 10 月 11 日まで（八月十八日から九月三日まで）Ｂスコリア上部（中之条、日光戦場ヶ原へ）
10 月 13 日（九月五日）浅間山噴火による被害報告が上野国から京都に届く
10 月 31 日（九月二十三日）軒廊御卜